

『ユリシーズ』の中の歴史再検証： Bloom と Griffith

鈴木孝志

A homerule sun rising up in the northwest from the laneway behind the bank of
Ireland (U 4.101-3)

『ユリシーズ』は1904年6月16日のダブリン（ブルームズデイ）という、地理的、時間的に限定され、しかもその時点でのダブリン社会を、実際に存在した人物をモデルとし、実際に生じた出来事を下敷きにして描かれている。そのことは当然のこととして歴史的事実の検証を読者に、特に後世にアイルランドの外で生まれ育った読者に要求することとなる。その作業を重ねると、作品中にはいくつものアナクロニズム的出来事が組み込まれていたり、事実と反することが描かれていたりすることに気づく。それらは子細に検討するとジョイスの勘違いや誤りというよりは、ジョイスがそのような要素を意図的に作品に持ち込むことで、表面上受け取られる文面とは違った状況を間接的に描き出しているのだと分かる。そのような事例の一つが、以下に検討する第12挿話の PAP Barney Kiernan's において、アイルランド独立運動を担った Sinn Féin の創始者 Arthur Griffith に、その根幹的アイデアを提供したのが Bloom であったとされる噂である。勿論 Bloom は当時のダブリンにモデルを持たない登場人物、主人公であるから、この事実自体が架空であるのはいうまでもない。しかし後に詳述するように、なぜ歴史的にアナクロニスティックな事実となってしまうかねない噂を、作品にわざと持ち込まなければいけなかったのかは、詳細に検討する必要がある。

これに関しては通常 Richard Ellmann の伝記的解釈に従い、Griffith の政治信条に共感しかつ彼が *Dubliners* 出版問題の際に示した Joyce への好意に報いるために、ハンガリー系ユダヤ人の子孫という Bloom の出自を利用して Bloom の政治運動の背景を作り上げて、当時の政治家で唯一、Griffith を登場させたのだとされている (*James Joyce* 335n)。確かに Joyce は弟 Stanislaus に宛てたローマ時代の手紙の中で、Griffith の唱える反議会主義的運動論を当面の有効な方策として支持している (*Letters II* 167,187)。*Dubliners* 出版問題で出版者 George Roberts との間にトラブルが生じた際、抗議の公開書簡を Joyce の要望に応じて掲載してくれた新聞社は、ダブリンでは Griffith の Sinn Féin 紙のみであったし (*Letters II* 291f1)、その後彼の助力を求めて訪問してもいる。しかし、Joyce の Sinn Féin 支持はあくまで留保付きの一時的なものであり、その後批判もしている (*James Joyce* 237, 334: *Consciousness* 55, 86-90)。作品の設定を全面的に伝記的事実

にのみに寄って立つことで可能とする解釈には、たとえジョイスが個人的な人間関係を作品に反映させることが好くあるとしても、偏りがあるという批判は免れ得ない。伝記的事実を援用しつつも、伝記的観点からのみの読み込みによらず、作品自体の自律性の中でも、BloomがGriffithにSinn Féinのアイデアを提供したという設定が、どういう意味を持ちうるのかということを確認する必要性は残っている。そうでなければ、ブルームズデイのBloomの思考の流れからは、Bloomが政治にそれもSinn Féinにそれほど強くコミットする様子が見いだせないのだから、JoyceはGriffithへの感謝のために、作品の一貫性を犠牲にしたとでも言わざるを得なくなるだろう。

Sinn Féinとは元々は1902年10月にGriffithが設立したthe Cumann na nGaedheal (Society of Gaels)で発表した政策であり、議会主義を放棄して英国政府への納税を拒否し、アイルランド選出国会議員のWestminster議会への出席も忌避をし、議会に代えてダブリンに評議会を設置することによって、アイルランド自治を実現させようという運動を意味した。作品が設定されている1904年は、Sinn Féinという名称が、政策からその運動に参加する人々を指すようになり、また彼らによって1903年のEdward VII世のダブリン訪問に抗議する運動を母体として設立された、国民評議会を意味するようになる1905年との狭間の時期である。またそれは、Griffithがジャーナリストから、大きな影響力を持つ政治家へと変身を遂げていく時期でもある。Sinn Féinの名が市民に認知されるのは、この1905年に開かれた国民評議会の大会決議によってであり、1904年6月の時点ではほとんど一般には知られておらず、その支持も一部の人々に限られていた(Rumpf and Hepburn 9)。つまりこの時点では、いわゆるSinn Féinといわれる組織体は存在していなかった。

ブルームズデイにおけるBloomの思考からは、現在の政治動向への強い関心があるように思われない。Bloomは社会改革や都市環境の整備には度々関心を示すが、最も大きな政治課題、アイルランド自治の獲得に関しては興味を示さない。それどころか、特に若者が抱きやすい、一時的な愛国主義的熱狂を信頼してはいない。五年前Chamberlainが名誉学位を受け取りにTrinity Collegeを訪問した際の抗議の騒乱に巻き込まれかけたことを思い出しつつ、Bloomはこう続ける。

Silly billies: mob of young cubs yelling their guts out. Vinegar hill. The Butter exchange band. Few years' time half of them magistrates and civil servants. War comes on: into the army helterskelter: same fellows used to. Whether on the scaffold high. (U 8.437-40)

この若さにまかせた熱気は長く続かない。結局抗議の中心をなしていたエリート学生達は数年のうちにアイルランドのエリート官僚になるか、名誉職に就くかするのだと見透かしている。

ただ、Parnell支持者であったという事実が示唆するように、Bloomは政治に対して最初から無関心であったわけではない。政治的な目覚めは意外と早く高校時代に遡る。William E. Forsterがアイルランド担当大臣であった1880年代初めに、彼は政治家となる野望を抱いたことがあった(U 16.1581-5)。Bloomの夢は現実離れしてはいても、全く可能性がないとも言い切れない。例えばユダヤ人Alfred Harrisは、1880年に自治主義者としてKildareから国会議員に立候補する。選挙には負けるが国政に参加しようとした数少ないアイルランドのユダヤ人の一人であった。彼はユダヤ人として初めてダブリン治安判事に1882年に任命された(Hyman 150-1)。しかしこのような政界や行政へのユダヤ人の進出は、極めて裕福な階層に限られたものであることは言うまでもない。原則的にユダヤ人が政治問題に関与しようとする動きは、アイルランドには存在しなかった。

また、1885年には自分の政治信条を友人達に公言していた。その中でYoung Ireland運動で指導的役割を果たした過激な活動家たちや、非合法組織Fenian Societyとの繋がりの濃いMichael DavittらをParnellとともに列挙しているのは注目に値する。また、Parnell自身が、Fenian Societyの実力主義と、彼の推し進める議会主義とのバランスを巧妙にとりつつ、政治家としての影響力を確立しまた指導者としての地位を築いて行ったのだ。

In 1885 he had publicly expressed his adherence to the collective and national economic programme advocated by James Fintan Lalor, John Fisher Murray, John Mitchel, J. F. X. O'Brien and others, the agrarian policy of Michael Davitt, the constitutional agitation of Charles Stewart Parnell (M. P. for Cork City), the programme of peace, retrenchment and reform of William Ewart Gladstone (M. P. for Midlothian, N. B.) and, in support of his political convictions, had climbed up into a secure position amid the ramifications of a tree on Northumberland road to see the entrance (2 February 1888) into the capital of a demonstrative torchlight procession of 20,000 torchbearers, divided into 120 trade corporations, bearing 2000 torches in escort of the marquis of Ripon and (honest) John Morley. (U 17.1645-56)

ブルームは計画経済論者、土地同盟支持者、パーネライトであり、グладストンの自治法案に賛同するグладストンの熱心な支持者であり、アイルランド自治に好意的である英国人政治家、リポン侯爵とアイルランド提督モーリーの信奉者であった。計画経済という点を除けば、当時のアイルランド民衆の政治感情と大差はない。そしてこのようなことを友人達に対して公言する十九歳のBloomは、自分のアイルランド人としてのアイデンティティに、大きな疑いは抱いていなかったようにさえ思われる。これは彼がそれだけパーネルという政治家を信頼していたためであろう。

Cabman's Shelterで思い出しているように、Parnellの熱心な支持者であったBloomが、Parnell

没後のアイルランドの政治状況に大きな距離感を抱いていたことは間違いなからう。少なくともそれは何度も変奏される Griffith による *Freeman's Journal* 紙の headpiece を揶揄するコメント、“a homerule sun rising up in the northwest from the laneway behind the bank of Ireland” (U 4.100-3) の皮肉なトーンからも効果的に伝わってくる。決して上ることのない自治の太陽。若干好意的にとれば、アイルランド銀行の北に位置する *Freeman's Journal* から、アイルランド自治への道が示されることになるのだが、実際は Bloom が広告取りとして働いている現在の *Freeman's Journal* は、Parnell スキャンダルで反 Parnell の立場へ転じたのを契機に、強力に Parnell を支えてきた愛国主義的議会主義の主張を転換し、1904 年当時には Parnell を切り捨てた Redmond 率いる Irish Parliamentary Party を支持する、穏健保守派の新聞に変質していた。時が経ち、Parnell の最大の政治的危機に臨んで彼を見捨てた新聞社の広告取りとして Bloom は働いている。Bloom の繰り返すフレーズには、自分自身への皮肉な思いも込められているのかもしれない。

Cabman's Shelter で Bloom が思い出すのは、それまでは Parnell の広報紙であった *United Ireland* 新聞社に対する反 Parnell 派の支配権争いに起因する、実力行使による対立抗争の場面である。その場に Bloom はパーネル支持者として居合わせていた。この時 Parnell は *United Ireland* を放棄し、代わりに *Independent* を設立した。この *Independent* でジャーナリストとして出発した Myles Crawford が、ジャーナリズムの世界を生き抜く中で変節し、今は *Freeman's Journal* の主幹を務めていることを苦々しく思っていることとも、この皮肉な思いは関連しているだろう。

Myles Crawford began on the *Independent*. Funny the way those newspaper men veer about when they get wind of a new opening. Weathercocks. Hot and cold in the same breath. Wouldn't know which to believe. (U 7.307-10)

正にその転向した新聞社で広告取りという下働きをし、Myles Crawford を風見鶏と軽蔑しつつも、そのように軽蔑している人間のご機嫌を取りつつ、獲得しようとする広告を掲載する条件を少しでも有利にしてもらおうと奮闘する、自分の惨めさも味わっているに違いない。

Bloom の Crawford 批判は、かつての Parnell 支持者に共通しているようである。事務所から出てきた Crawford のイメージが、無様に描写されるのは Bloom の意識の反映と捉えるとしても、MacHugh が「偽紳士 (the sham squire) のお出ました」(U 7.348) と呼びかけるのは、この言葉が密告者、裏切り者を含意しているという当時のダブリンの常識に照らすと、かなりきつい冗談であるし、Crawford の登場にあわせて、Simon は Ned Lambert を連れてさっさと立ち去っていく。表面上は Crawford に友好的な Ned Lambert ですが、去り際に J. J. O'Molloy に向かって「アル中症状だ」と Crawford への嘲笑を耳打ちしていく (U 7.366)。彼らは表面上は Crawford をたて

ながらも、内心では、器用に立ち回ってジャーナリズムの世界で生き残った彼を快くは思っていない。

では、ブルームズデイ当時の、ハンガリー系ユダヤ人の血を引くアイルランド人 Bloom の立場とは、どのようなものであったろうか。19世紀末以降のアイルランドは、アイルランド純血主義回帰が声高に主張されていた時代であった。政治的には1879年に土地同盟が Michael Davitt によって結成され、小作農の権利が紛争の焦点となっていた。1884年には Michael Cusack らによって the Gaelic Athletic Association が設立され、植民地統治下で抑圧されていたアイルランドの伝統的なスポーツの復興が図られた。更に1893年、the Gaelic League が Douglas Hyde によって設立され、ゲール語の保存と復興に中心的な役割を果たした。これらの動きは全て純粋なアイルランド文化と人種とを志向するものであった。それを象徴するのが the Gaelic League 発足の一年前に Douglas Hyde が「アイルランドの非イギリス化の必要性」(“The Necessity for De-Anglicising Ireland”) と題して行った講演である。その中でアイルランド純血主義が極端なまでに強調されている。

we must strive to cultivate everything that is most racial, most smacking of the soil, most Gaelic, most Irish, because in spite of the little admixture of Saxon blood in the north-east corner, this island *is* and *will* ever remain Celtic at the core. (Hyde 169)

このような社会情勢の下で他者が、ましてやユダヤ系アイルランド人が、社会に占めるべき場所は極めて限られている。Deasy 校長が Stephen に向かって言った、“Ireland, they say, has the honour of being the only country which never persecuted the jews...Because she never let them in” という言葉に象徴されるように、アイルランドにおける反ユダヤ主義は強固に存在していた。もっともこの Deasy の言葉はアイルランドの現実を反映したものではない。しかし皮肉な見方をして、共和国アイルランドが、ナチの迫害を逃れようとしたユダヤ人の受け入れに冷淡であったことを重ね合わせれば、これもアイルランドの未来を先取りしたアナクロニズムの一つと言えないこともない。歴史的事実を考慮すれば、この時代にはユダヤ系アイルランド人という概念すらが、認められてはいなかった。例えば Hyman はこう述べている。

The mere concept of the Irish Jew raised a laugh in the Ireland of Joyce's day. Edward Raphael Lipsett (1869-1921), a Dublin Jew, journalist, novelist, and playwright, wrote impressions of the Jews in Ireland in 1906:...'The term "Irish Jew" seems to have a contradictory ring upon the native ear: the very idea is wholly inconceivable to the native mind...' [The] situation of the Jews (was) in the unsympathetic social climate of Ireland at the turn of the century, at best grudgingly neutral to them and at worst openly hos-

tile, and that situation of aliens detached from the Irish world around them, living in an Irish exile, (was) never wholly accepted by their fellow-countrymen... (Hyman 176)

この社会的背景を前提にすれば、「市民」やそのほかのダブリン市民がBarney Kiernan'sで示した、露骨に反ユダヤ的対応は当たり前のことであったし、そのような社会に育ったBloomが、若くして政治家を志したり、アイルランド愛国主義の立場に立っていたことが奇異にさえ思えてくるのだ。

一体Bloomはブルームズデイのダブリンで、社会的にどう規定されるべき存在なのか。実はこの問題は曖昧で複雑である。Bloomは、いわゆるアイルランドに住むユダヤ人として定義するには余りにも特殊である。父はハンガリー系ユダヤ人ではあるが、ユダヤ教とユダヤ人社会を捨ててアイルランド人と結婚した。彼はアイルランド人の母から生まれ、割礼を受けておらず、ユダヤ教の教義にも従っていない。最初はプロテスタントとして受洗し、Mollyとの結婚に際して改宗したカトリック教徒ではあるが、宗教には無関心であり、内実無神論者である。しかもパブやレストランで食事を取りワインを飲むという行為は、当時の状況からすると極めて非ユダヤ人的習慣である。ダブリンのユダヤ人社会においては、異教徒との付き合いは、20世紀中葉にさしかかった時点でもかなり限られていた。ましてや異教徒との結婚は極めて希であった。そのような結婚は、ユダヤ人社会からの絶縁を覚悟しなければならなかった(Ó Gráda, 176,187)。しかもBloomの家系は2代に亘って異教徒との結婚が行われている。ユダヤ人社会からは母がユダヤ人でなく、ユダヤ教を信じてもないBloomは、厳密に言えばユダヤ人と見なされるはずはない。しかし、アイルランド人から見るとどうなるのか。そのことを端的に示しているのはNed Lambertの単刀直入な問である。

—Is he a jew or a gentile or a holy Roman or a swaddler or what the hell is he? says Ned. Or who is he? (U 12.1631)

この問はBloomがいかにダブリンの市民社会に同化しているか、それにも係わらずいかに疎外されてもいるかを示している。Lambertは、いわゆる典型的ユダヤ系アイルランド人の範疇にBloomを置くことを躊躇っている。Bloomの社会生活はユダヤ人の社会生活よりはアイルランド人のそれに近い、というよりも自分たちと変わらない。だが、一方でBloomは自分たちとは違う存在として認識されている。Lambertのような質問が出ること自体、Bloomをユダヤ人と嫌悪する酔客達が、実ははっきりした根拠がないにも係わらずBloomをユダヤ人と決めつけていることになる。彼らはBloomが自分はユダヤ人ではないと主張する根拠さえ知らない。差別とはこういうものであろう。

Martin Cunningham は、情報をいかのように提供する。

—He's a perverted jew, says Martin, from a place in Hungary...His name was Virag, the father's name that poisoned himself. He changed it by deedpoll, the father did. (U 12.1635-41)

注目すべきは、この事実関係の説明には、Cunninghamの反ユダヤ的感情が密かに埋め込まれていることである。本来は converted つまり a Jew converted to Christianity, 又は a converted Christian というべき表現を、perverted という侮蔑表現へと変質させているからだ。この意図的語彙選択に、Dignamの生命保険問題の解決にはBloomの助けを借りようとしていながら、内心はBloomをユダヤ人と見下しているMartinが露出している。

これがブルームズデイにおけるBloomの社会的立ち位置である。社会から幾分疎外され、政治にも関心を失ったと思われるBloomに対して、その彼がArthur GriffithにSinn Féinという理念を示唆したという噂が囁かれるというのはどういうことであろうか。しかもそれはあたかもダブリン市当局のお墨付きのついた情報であるかのように、二人の役人の口から出る。最初にJohn Wyse Nolanから提供され(U 12.1573-7)、ついでMartin Cunninghamによって追認される(U 12.1625)。このようなことが実際に起こりえたであろうか。ただ、この情報が、Nolanから出てきたことになると、それなりの意味を持つことにはなる。ここに登場しているJack PowerとJohn Wyse Nolanは、*Dubliners* 出版問題で折衝したCastleの役人John Wyse Powerがモデルであり(CW 244f8)、彼はユダヤ人に対して好意的立場をとっていたことが知られている(Hyman xvii, 183, 185)。Joyceがダブリンの知的階級を揶揄した'Gas From A Burner'(CW 242)の中では、例外的に好意的に言及されている。

既にこの日、NolanはBloomがDignamの遺族への募金に、5シリングも即金で提供したことを知り、決して皮肉な意味ではなく、ユダヤ人の中に見いだされる思いやりを認める(U 10.980)という、極めてプロ・ジュウイッシュな面を時代にもかかわらず見せていた。Bloomがアイルランドを自分の国だと主張するのに対して、バブの酔客達が頭から嘲笑するのと違い、この問題に対するNolanと、*Ulysses*に登場する人物の中では数少ない冷静知的な人物として造形されているO'Molloyとのやり取りは、たとえ幾分かの嘲笑のトーンを帯びていたとしても、読者の予想以上に同情的なものだと受け取るべきなのだろう。何故ならば、以下の「市民」を先頭とするファナティックな愛国主義への柔らかな反論は、BloomとGriffithの噂を下敷きにすれば、実はそれなりの根拠があっただけでなされていたことになるからだ。

—And after all, says John Wyse, why can't a jew love his country like the next fellow?

—Why not? says J. J., when he's quite sure which country it is. (U 12.1628-30)

しかも、Sinn Féinにまつわる不確かな情報が、Bloom不在の時に「市民」の面前で明らかにされるのは、如何にも皮肉な設定である。Bloomに意見の論点を取り違えていると反論された「市民」は、Robert Emmetの偶像化に抵抗するBloomとの言い争いに決着をつけようと、高々と宣言する。

—*Sinn Fein! says the citizen. Sinn fein amhain! The friends we love are by our side and the foes we hate before us. (U 12.523-4)*

しかし、そのSinn Féinの具体的な実践が、この運動を前面に押し立てることで排斥しようとした、当のBloomによる提案に基づいて行われようとしていたとしたら、「市民」の過激な思想は実はなんら実体のないものであることが暴かれてしまう。語り手は、BloomがSinn Féin創設に係わっていたという情報が伝えられた時の、「市民」や周りの酔客たちの反応を伝えない。彼らはテキストから急に消え去ってしまう。彼らの存在の一時的消滅は、この情報が彼らに与えた衝撃の大きさを逆説的に浮き彫りにする。その証拠に「市民」がこの後に会話に口を挟んで再登場するのは、話題がSinn FéinからBloomのユダヤ人としてのアイデンティティに変化してからだ。

Nolanによってもたらされたこの情報が正確ではないとしても、一体何に基づいた情報であるのかは検証される必要がある。意外なことではあるが、Bloomが一時、それも最近まで、Griffithの政治運動に参画していたのは事実である。そのことはモリーが証言している。

and he was going about with some of them Sinner Fein lately or whatever they call themselves talking his usual trash and nonsense he says that little man he showed me without the neck is very intelligent the coming man Griffiths is he well he doesnt look it thats all I can say still it must have been him he knew there was a boycott (U 18.383-7)

ただ、ブルームズデイの時点でBloomがGriffithと行動を共にしているかと言えば、その可能性は極めて小さいと考えざるを得ない。そのことを明確に示唆するBloomの回想がある。

James Stephens' idea was the best. He knew them. Circles of ten so that a fellow couldn't round on more than his own ring. Sinn Fein. Back out you get the knife. Hidden hand. Stay in. The firing squad. Turnkey's daughter got him out of Richmond, off from Lusk. Putting up in the Buckingham Palace hotel under their very noses. Garibaldi.

You must have a certain fascination: Parnell. Arthur Griffith is a squareheaded fellow but he has no

go in him for the mob. Or gas about our lovely land. Gammon and spinach. Dublin Bakery Company's tearoom. Debating societies. That republicanism is the best form of government. That the language question should take precedence of the economic question. Have your daughters inveigling them to your house. Stuff them up with meat and drink. Michaelmas goose. Here's a good lump of thyme seasoning under the apron for you. Have another quart of goosegrease before it gets too cold. Halfed enthusiasts. Penny roll and a walk with the band. No grace for the carver. The thought that the other chap pays best sauce in the world. Make themselves thoroughly at home. Shove us over those apricots, meaning peaches. The not far distant day. Home Rule sun rising up in the northwest. (U 8.457-74)

Young Ireland運動と失敗した1848年蜂起への、若い日の思い入れを反映させるかのように、BloomはFenian Societyの創始者、James Stephensの組織論を高く評価している。それに比肩できる魅力を備えているのはParnellであり、一方Griffithは頭の固い勇気のない俗物であり、聞く者の耳に快い主張を振りまく議論に明け暮れているとBloomは批判している。彼の批判はアイルランド文化復興運動を、全ての課題に優先させていることにも向けられている。実際Sinn Féinに対してはbourgeois political movementという批判も出ていた。この文脈で思い起こされるGriffithの“Home Rule sun rising up in the northwest”という言葉は如何にも辛辣である。一体Griffithは*Freeman's Journal*を批判したのであるだろうか、それともこの時の彼は、アイルランド自治は決して実現されることのない夢と考えていたのだろうか。Bloomが折に触れて思い出すこの警句は、自分へ向けられた自己卑下と言うよりは、実はGriffithへの訣別の辞であり、アイルランド自治がParnellの死と共に消滅したという、諦念であったと言えるのではないか。今アイルランドの政治潮流を牛耳っているのは、Griffithに感化され穏健な抵抗運動と文化活動に全てを傾け、単に大言壮語して自己満足している、「市民」によって象徴されるような輩だとしかBloomには見えなかったのであろう。それだけ彼はParnell失脚後も、自治への現実的アプローチを自分なりに模索し続けていたと言うことになる。その彼が最後に出会ったのがGriffithであったと考えるのが自然である。しかし、GriffithはBloomの期待に応えることはなかった、こういう背景になるだろう。

噂が伝えるとおおりBloomはハンガリー革命をヒントに、Sinn Féinのアイデアを与えたとしても、この文脈からはそれに止まらず、Stephensが考案したFenian Society (IRB)的組織論をSinn Féinに採用するよう、それを大衆を動員する契機とするよう進言したが、Griffithは税金の支払い拒否と国会議員の議会出席忌避を主体とする穏健主義と、ゲーリック文化啓蒙主義を崩すことはなく、BloomはGriffithと袂を分かったと読み取れる。Bloomの主張は後にGriffithが辿ることになる道の先取りである。やがてGriffithは、アイルランド自治に反対する武装組織the Ulster VolunteersがUlsterで設立されたのに対抗して、南に作られたthe Irish Volunteersを支援し、

最終的にはアイルランド内戦を指揮することになるのだが、これはずっと先の話になる。極めて平和主義者と思われる Bloom には、このように過激な一面が隠されていたのだ。しかし、それだけであろうか。政治的立場の違いだけが、このように激しい侮蔑の感情を生み出させているのだろうか。

改めて明確にしておきたいのだが、この設定はあくまで作品上でのフィクションである。Griffithはこの当時IRBに何らかの形で関係していたと考えられるのだから、改めて Bloom によって Stephens の組織論を知らされるわけではないし、必要もない。またこの1904年当時の Sinn Féin とは、組織体を意味していない、いわば、Self-help の理念であり、Griffith がハンガリー革命とその後のオーストリアとの講和成立の歴史からヒントを得たものであることは、彼が1904年に出版した *Resurrection of Hungary* から自明の事実である。だから、Bloom が Griffith に Sinn Féin の理念を与えたという噂と、ここで Bloom が考えていることとは、歴史的には相容れない事実を築き上げていることになる。しかも、Molly の言葉に基づくならば、既にこの時点で、Sinn Féin は理念ではなく組織体を意味していることになる。要は、ここまで作り上げてでも Griffith を Bloom と関連させて登場させねばならない理由が、他に無ければならない。

実は当時のアイルランドはユダヤ人排斥問題で大揺れしていた。1860年代に三百人以下に減少したユダヤ人は、80年代から増加に転じ、1901年までには十倍以上と膨れあがった。これは1882年にロシアで成立したユダヤ人弾圧法、五月法の影響やその後東欧で発生したポグロムの影響が大きく、多くの東欧系ユダヤ人が迫害を逃れて国外へと移住した。その一部が主にリトアニアからアイルランドに移ってきたと言われている。またこのようにしてこの時期流入した東欧からのユダヤ人は、それまでのユダヤ人とは違い特別な職業技術や資産を持っておらず、行商を生業とする者がほとんどであった。また英国化するのも早かった。このような状況でアイルランドに反ユダヤ主義が強まってきた (Hyman 160)。増えたとは行ってもユダヤ人の数は微々たるものであったし、アイルランドの反ユダヤ主義は他の国々と比較すれば極めて穏健なものであったが、それでもやはりいくつかの事件は起きた。その典型が Limerick の排斥運動である。

1904年1月に、一人の狂信的神父のアジテーションによって Limerick で始まった反ユダヤ主義の動きは、土地同盟創始者の Michael Davitt の仲裁にもかかわらず全国的広がりを見せ、ジャーナリズムには反ユダヤ主義的主張があふれていた。現実のダブリン社会は、『ユリシーズ』に描かれたように、ユダヤ系アイルランド人 Bloom を曲がりなりにも自分たちの共同体に受け入れるような雰囲気にはなかったことは、先に引用した Hyman の論文からも明らかであろう。つまり、ジョイスが作り上げた1904年6月16日のダブリンは、Bloom の置かれた人間関係から言えば、ユダヤ人に寛容な、多分にジョイスの願望が投影された架空の社会であったのである。

この問題に関連して、Griffithには非常に興味深い事実がある。それはGriffithがユダヤ人差別論者であったことである。ユダヤ人流入が遅かった、それ故にユダヤ人の数が少なかったアイルランドでは、ユダヤ人の社会的影響力は小さかったのだが、それでもGriffithは特にジャーナリズムからのユダヤ人排斥を強く主張していた。当時 *United Irishman* の主幹であったGriffithは1月のLimerickでの暴力事件を受け、同月23日付の社説でユダヤ人と共にDavittをも強烈に批判する論陣を張ったのである。4月にはこう主張した。

The Jew in Ireland is in every respect an economic evil. He produces no wealth himself—he draws it from others...He is an unfair competitor...and he remains among us ever and always an alien. (Nadel 60)

Griffithのこの反ユダヤ的態度は、Limerickでユダヤ人暴行事件が起こる前から顕著であり、特にユダヤ人とジャーナリズムを結びつけて攻撃する論法は、十九世紀には広く行き渡った珍しくないものであった。Griffithはこのありきたりの論理を臆面もなく盗用して、「総てのユダヤ人は機会がありさえすれば裏切るのは間違いない」と断定し、1899年10月には

the pen of the Jew scribe is uplifted to serve the cause of Sister England. (Nadel 66)

と主張していた。つまりこの点に関しては彼はDeasyや「市民」と変わることはない。これがBloomがGriffithのもとを去り、その後彼に対してこれ程侮蔑的な低い評価を下す一番の原因であったとも考えられる。Griffithの反ユダヤ主義を熟知しながら、BloomとGriffithを結びつけるという設定を『ユリシーズ』にひっそりと埋め込むことで、ジョイスはGriffith及びダブリン社会の偏狭さを暴き出そうとしていた。そしてこのことは、Griffithを知るダブリンの人々には実は一目瞭然であったのではないか。

この文脈に置けば、「市民が」“Sinn Fein”と叫ぶことでSinn Féinの創立者であり、かつまたユダヤ人差別主義者であったGriffithと重ね合わされ、そのSinn FéinのアイデアをGriffithに提供したのがユダヤ人Bloomであったという情報がその上に被されることは、二重のアイロニーを生み出す。

Griffithの政策を支持し、*Dubliners*の出版妨害に際しても好意的対応をしてくれたGriffithに対し、ジョイスは好意を感じていたに違いない。しかし、強硬な反ユダヤ主義者であるGriffithをそのまま『ユリシーズ』に登場させることは、Griffithを否定的に描くことが必然となる。ジョイスは敢えてGriffithをBloomとを結びつけ、Sinn Féinのアイデアを与えたのがBloomであるという虚構を作り上げることで、Griffithの反ユダヤ主義を包み隠し、政治家Griffithを作品の背景に描き込むことが出来たのである。しかしながら、このことによって、時代状況を基準に

して考えると極めてユダヤ人に対し寛容なダブリン社会が、現実にはユダヤ人差別に満ちていたことが間接的に示されることにもなったのである。

このアイロニーが、Bloomの議論がユダヤ人迫害の歴史へと展開されていく、必然的な流れを生み出すし、Bloomの議論に一層の迫真性を付加することも間違いない。お前の国は何処なのだと迫られ、

—And I belong to a race too, says Bloom, that is hated and persecuted. Also now. This very moment. This very instant. (U 12.1467-8)

と自らユダヤ人としてのアイデンティティを認めたときの最後の言葉は、19世紀末から20世紀初頭にかけて激しかった、ロシア及び東欧でのユダヤ人追放や虐殺を意味しているのと同時に、正に現在進行中の、Limerickでのユダヤ人排斥運動をも含意していることが、暗に強調されていることになる。当時のダブリンでBloomのように“I’m talking about injustice” (U 12.1475)と声高に宣言できたユダヤ人はいなかったのである。

引用文献

- Joyce, James. *Ulysses*, New York: Random House, 1986.
- _____. *Letters of James Joyce*, vol1 ed. Stuart Gilbert, vols 2&3, ed. Richard Ellman, London: Faber and Faber, 1966.
- _____. *The Critical Writings*, eds. Ellsworth Mason and Richard Ellman, New York: The Viking Press, 1964, 1972.
- Ellman, Richard. *James Joyce*, New York: OUP, 1959, rev. 1982.
- _____. *The Consciousness of Joyce*, New York: OUP, 1977.
- Hyde, Douglas. *Language, Lore and Lyric: Essays and Lectures*, ed. Brendan Ó Conaire, Dublin: Irish Academic Press, 1986.
- Hyman, Louis. *The Jews of Ireland*, Dublin: Irish University Press, 1972.
- Nadel, Ida B. *Joyce and the Jews: Culture and Texts*, Iowa City: University of Iowa Press, 1989.
- Ó Gráda, Cormac. *Jewish Ireland in the Age of Joyce*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2006.
- Rumpf, Erhard and Hepburn, Anthony. *Nationalism and Socialism in twentieth-century Ireland*, Liverpool: Liverpool University Press, 1977.